

---

# 届け

うな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

届け

### 【Zコード】

N4682BA

### 【作者名】

うな

### 【あらすじ】

尻尾があつたらしいのに。そうすれば、私のこと少しはあの人に伝わるのにな。

長谷部さんのお家にお呼ばれするのは初めてじゃなかつたけれど、飲み会の帰りというシチュエーションには少しどきどきした。

綺麗に整頓された玄関。玄関は家の顔で、家は主の内面を写すと言つけれど、すつきりと隙なく機能的な玄関の様子は私の中の長谷部さんは微妙に重ならなかつた。

「汚いけど勘弁してね」

私がお邪魔しますと言つ前に長谷部さんが言つ。何処をどう見れば汚いところなんかあるんだろう、春先に来た時と変わらず長谷部さんの城は掃除婦でもいるのかと思う程に小綺麗だつた。

一人暮らしの兄が一人いる身からしてみればこれはもう小さな奇蹟だ。リビングの真ん中に置かれたガラスのテーブルは顔が写るぐらいピカピカに磨かれていて、床に食べさしのツマミが転がつてることもビールの空き缶が散乱していることもなかつた。

「お家の人にはちゃんと連絡した?」

「あ、はい。さつき車の中で、メールしました」

「一応、電話しといた方がいいんじゃない? メールじゃ届いたか分かんないし」

テーブルと同じぐらいピカピカに磨かれたグラスに入った透明な液体。ことりと置かれたのを上から見ると底が透けてタンポポのロースターが見える。いちいちセンスいいなあ、長谷部さん。

「とりあえずお水。一息ついたらちゃんと電話すること。また直也にどやされたくないからねえ」

「またつて……ナオ、長谷部さんに何かしたんですか?」

「そんな大したことじゃないけどね。この前、河川敷でバーべキューしたでしょ? その時、俺が薺湖ちゃんにビール勧めたの見られてたみたいで。「妹酔わせて何するつもりですか!?」って、一分後ぐらいにわざわざメールで」

「あのバカ兄……。すいません、なんかもう色々子供で」

「そうだねえ。妹思いのいいお兄さんだと思うけど、ちょっと過保護が過ぎるかなあ。薔湖ちゃんはもう立派なレディ でもないか」

「なんで胸見て視線逸したんですか！？」

「ごめんごめん、と笑う長谷部さん。セクハラすれすれ（というか、そのもの）のギャグもこの人が口にすると笑えてしまうのだから不思議だ。

「ふんっ、どうせ私はないペタンですよ。悪う『じざんしたね』

「いやいや、そのお陰で安心して男役を任せられるから。ほんと、脚本楽でいいわあ」

「そういうフオローいらぬですっ！」

大げさに怒つてみせると「流石は主演男優の演技は違うなあ」とちやちやを入れられる。男優じゃないとか演技じゃないとか色々突つ込むと、今度は「もしかして、本当は薔湖くんだった？」なんて別の方向に話が飛んでいく。私と長谷部さんの場合、会話はキヤツチボールじゃなくてフリスビーだ。長谷部さんが投げたフリスビーを私がキヤツチする。多分、犬みたいに尻尾を振りながら。尻尾があればいいのに。そうすれば、私の気持ちも少しは伝わるはずなのに。

長谷部さんと初めて出会ったのは、市民ホールにナオのサークルの演劇を見に行つた時だつた。その時私はまだ高校生で、更に言えば高3だつた。

「受験の息抜きになるだろ？」なんて如何にもいい兄貴ぶつたナオの誘いに乗つて自転車で市民ホールへ行つた。中に入ると思つたよりも人が入つていて、舞台近くの席は全て埋まつていた。

開演まではまだ少し時間があつて、仕方なく入り口でもらつた劇のチラシを読んで時間を潰した。全然知らないタイトル。どうやら

オリジナル劇のようで、脚本の欄には長谷部悠と書いてあった。

勿論その時の私は長谷部さんと知り合いでも何でもなかつたからサラッと読み飛ばした。そして演劇が終わつた後……その名前を胸に刻み込んだ。

言葉に出来ず、ただ身体が疼いた。賞賛の拍手がホールを満たす中、私はこの人の脚本で演じてみたいと静かに思つていた。それは一方的ではあつたけれど間違いなく私と長谷部さんの“出会い”だつた。

「電話、終わつた？ 隨分長かつたけど、怒られた？」

「……それが、ナオのヤツが実家に帰つてたみたいで」

「うわ……それはそれは。月曜は一人で説教かな」

「大丈夫ですよ。ナオも真夜さん連れ込んでたみたいだし「女優に手を出すとかないわー」とか言っておけばいいんですよ」

「親公認の相手を持ちだしてもあんまりダメージないと思つけどなあ」

「そんなことないですよ。ナオ、人前で色恋を弄られるのすごい苦手なんです。だから十分牽制にはなりますよ」

「蓉湖ちゃんは逞しいなあ」

「男兄弟に囲まればこうもなりますよ」

そんな話をしながら二人でソファに腰掛けてココアを飲んだ。長谷部さんの入れるココアはちゃんとミルクでパウダーを練つてあって優しい味がする。猫舌な私のために冷ましてくれる気遣いが嬉しかつた。

ナオと同じ年なんて信じられない。私よりたつた二つ年上なだけなのに、長谷部さんはこんなに大人だ。

話が上手で、気配りができる、皆が避けて通るつとすることをちゃんとできて。今日の飲み会だって長谷部さんは一滴もアルコールを飲んでいない。酔い潰れたり終電を逃したりする連中のためにわ

ざわざ車で来てソフトドリンクを飲んでいた。幸い今回は何事も無くお開きになつたので私はここにいる。「脚本について教えて欲しいことがある」なんて即興の嘘までついて。

尻尾が欲しい。大きく振つて伝えたい。こんなにも好きなんです、長谷部さん。“出合つた”時から出合つ前から。私は痺れちゃつてるんです。長谷部さんに。長谷部さんで。

「んー、ちょっと顔赤いね。もしかして、まだアルコール残つてる？」

「え？ あ、いや、その……ちょっと、だけ」

貴方のせいです長谷部さん。なんて、言えない。脚本に書かれた愛のセリフならいくらでも囁けるのに自分の口じゃ好きと言えないと。

ああそうだ、思い出した。私が演劇始めた理由がそれじやん。言えないことを言いたいから。余計なことはいくらでも言えるのに本当に言いたいことは何一つ口にできない自分を変えたかつたから。なんだ……ちっとも成長しないじやんか、私。流石に凹むわ。

「えつと……なんか、落ち込んでる？」

正解です、長谷部さん。というか、そんなことまで分かるなら私の気持ちも察して下せい。その口で好きとか言って下さい。抱きしめて蓉湖つて呼び捨てで呼んで下さい。あ……だめだ、想像しただけで濡れそう。

「いや、濡れはしないけど」

「……なんの話かな？」

「なんでもないですよう」

甘いココアを啜つて、隣に長谷部さんがいて。今なら酔つ払つてるって設定が使える。一人掛けのソファは、そんなに広くない。「脚本の話ですけど」  
「急に話が跳んだね」  
「はい。それで、脚本の話なんですが」  
「押すねえ。それで、脚本がどうしたの？」

「例えばですよ。例えば、私をヒロイン、長谷部さんを主人公とする恋愛劇があるとします」

「うん?」

「それで、一人がまさに結ばれようとする場面が今この瞬間だとします」

「……うん」

「長谷部さんなら、どう脚本を書きますか。この演劇のキモとなる一番ドラマチックで大切な場面です。ヒロインと主人公を、どう動かしますか?」

「それは

「

何かを言いかけて、長谷部さんは口を一度閉じた。そしてそのまま天井と壁の接合点に視線を寄せて、一度頭を搔いた。

それは癖だ。長谷部さんが何かを真剣に考えている時……脚本を書く時の。

きっと今、この人の世界に蓉湖はいない。私はたった今、無名の役者となつて長谷部さんの中で再構成されている。長谷部さんはそういう人だ。演劇の事になると急に人が変わる。傍から見ればバレバレな私のアプローチだつて脚本の例示としか見ていいのだ。

「よし」

集中し始めてから数分、再び長谷部さんの目が私を見た。完全に演劇モードだつた。

「今から俺がいくらかセリフを投げかけるから、蓉湖は『うん』って答える。一ニュアンスは任せる。いいか?」

「は、はい」

あまりの迫力に思わず腰が引けてしまう。本業は脚本なのに並の役者より演技ができるんだから、ほんとにこの人は演劇馬鹿だ。

「よ、蓉湖」

演技が始まったのか長谷部さんの手が私の肩に触れた。手が小刻みに震えて緊張が伝わってくる。……上手い。まるで演技じゃないみたい。

「薔湖、話がある。聞いてくれるか？」

「うん……」

上ずつた声。上田遣いに長谷部さんを見る。演技……これは演技だ。心のなかで何度か咳くと氣恥ずかしさが消えて痺れるような緊張感が身体を満たした。少しずつ、私はヒロインになつていいく。

「ずっと言つたかった。舞台で演じる薔湖を見てからずっと、俺は薔湖のための脚本を書きたいと思つてた。四年前、学園祭で薔湖を見てから、俺の中にはずっとお前が住んでいた」

「うん?」「うん?」

「好きだ、薔湖。これからは俺だけのために演じて欲しい。舞台の上でも、それ以外でも。俺だけのためにその人生を演じきつて欲しい。……いいな?」「うん!」「うん!」

あまりの熱演に呑まれそうになる。まるでこれは演劇でもなんでもなく、本当の告白であるかのように錯覚してしまつ。それはとっても嬉しくて、けど悲しいことだつた。例え台詞だとしても長谷部さんに呼び捨てにされて、好きと言われて心が蕩けそになつた。いや、たぶん蕩けていい。私の心は長谷部さんの言葉でどろどろに溶けて形を失つてしまつた。今はそれが心地よくて、すごく幸せで。だけど、それは所詮作り物の紛い物。この劇が終わつてしまえば私と長谷部さんはいつもの関係に戻つてしまつ。

……やだ。そんなの、やだ。

せつかく好きって言つてくれたのに、告白してくれたのに。長谷部さんが！　私に！

そんなのやだ。嫌だよ……終わるなんてやだ。まだ始まつてもいなつのに勝手に終わらせないで。私は、こんなに長谷部さんが好きなのに！

「大好き！　ずっと好きでした！　三年前市民ホールであなたが脚本をした演劇を見てから、顔も知らないあなたに恋してました！　好きで好きで大好きで、頑張つて勉強しました。絶対受からないつ

て言われた大学にも合格しました！ 演劇サークルに入つて初めてあなたの顔を見た時、声を聞いた時、話をしたとき、もつともつともつと好きになりました。大好きなのに大好きなのに、もつと好きになりました。もう好きすぎて頭おかしくなるぐらい大好きで大好きで！ なのに全然気づいてくれないなんて酷すぎます！ 理不尽です！ 責任とつて下さい！ 私をこんなにした責任とつて下さい口クテナシ！」

あ……終わった。こりや、絶対引かれた。なんだそれ。酷いって何が。理不尽で何が。口クデナシって誰のことだ。ああ……もうなに言つてるか全然分かんない。

顔熱いし。  
頭茹だつてるし。  
なんか涙ぼろぼろ流れてくるし。

好き！ 大好き！ 結婚しろバカあ！」

まだ言うがこいつは、ハカはお前だ。少し加減にしろ。今すぐ下座して長谷部さんにお詫びしろ。身の程知らずな」と言つてすいませんでしたって言えバカ芙蓉湖！

「う…………ひっぐ…………はせべれん…………はせべあん…………」

「…………　蓉湖ちゃん。ちょっと、落ち着いて、ね？」

の  
「

「それは分かつたから。ちゃんと聞いてたよ。全部、聞いてたから。だから、落ち着いて。俺に、返事を言わせて」

へん、じ……？ あれ？ わたし、だきしめられて……？

「よしよし。もう、可愛すぎでどうにかなっちゃこやつだ。俺も好きだよ、藤湖ちゃん。演技中の口調も全部本音。といふか、俺でも

あそこまであからさまに言わわれれば流石に反づくよ

えつ？ えつ？ えつ？

「直也には悪いけど……もう我慢するのはヤメだ。葵湖ちゃん、今日から俺の彼女。それでいい？」

「え？ 長谷部さん……いいの？ 私、なんかで……」

「はあ……お願いだから、あんまりベタな台詞言わせないでよ。仮にも演劇やってるんだからもつと、じつ、ウイックに富んだストーリーな会話をだねえ」

「好き」

「あの、葵湖ちゃん？」

「好き好き好き好き……大好き……愛します……長谷部さん……

好き。ちゅーして？ ちゅってして？ だめ？ 私のこと、きらい？」

「…………いや、なんというか……突き抜ければ無駄な装飾はいら  
ないんだね」

「好き……好き……」

「はーはー。俺も好きだよ、葵湖」

その日、私と長谷部さんは初めてのキスをした。ココア味のキスは、少しショッパかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4682ba/>

---

届け

2012年1月12日20時47分発行